復活節第４主日　ヨハネ 10：１～10　良き羊飼い

イエス様は、自然や農耕といった民衆にわかりやすいたとえを使って自分が救い主であることを語りました。今日用いられている「羊飼いのたとえ」もその一つです。羊は、とても耳のいい動物です。また、警戒心が強いので初心者が羊の番をするのは難しいそうです。少しずつ羊飼いの顔や声、性格を覚えて安心していきます。羊飼いは夜、オオカミなどの外敵から守るために、囲いの中庭で、羊の群れと一緒に過ごしました。朝になると自分の羊たちを呼びだして牧草地に連れて行きました。この「よい羊飼いの声」を聴けるかどうかが、羊にとっても私たちにとっても大切なポイントです。

さて、この「羊飼い」のたとえは、盲人が安息日に癒される９章とのつながりで読む必要があります。９章でイエスは、安息日にたまたま出会った盲人を癒しましたが、ファリサイ派の人々は、当時のユダヤ社会が大事にした安息日をイエスが破ったので危険人物として殺意を抱くようになります。この話しの流れの中で「羊飼い」のたとえを理解するとこうなるでしょう。危険を顧みずに目の前の人を助けたイエスが「よき羊飼い」で、人の苦しみを見ても決まり事の世界から出ないで何も手を貸さない宗教的エリートが「盗人」ということになります。羊のような聞く耳があれば、私が誰であるか分かるはずだ、とイエスは民衆に語っています。

それでは、この「良き羊飼い」の話しを私たちに当てはめたらどうなるでしょうか？

私たちの日常には、さまざまな声、情報があって、どれがイエスの声、良い牧者の声なのか判別しにくいのが現状です。

イエズス会の創設者、イグナチオは黙想の手引書『霊操』（＃335）の中で、「声」を「天使」と言い換えてこう表現しています。「善の天使は、優しく、軽く、柔らかく、しずくが海綿（うみのわた）に入るようその霊魂に触れる。　　そして悪天使は、鋭く、騒がしく、不安を起こし、しずくが石の上に落ちるように触れる。」とあります。善天使は、落ち着きと平和を与えてくれます。悪天使は不安やけたたましさに導きます。

世の中は新型コロナウイルスに関する情報で溢れています。そんな中で、善天使の声を聴くのは難しくなっています。そこで、私にとっての善天使の声をご紹介します。手元にある４枚組のＣＤの中でも一番お気に入りの演奏が YouTube でも聴けるのでお試しください。

https://www.youtube.com/watch?v=oSW_DgboqVM（バッハの平均律クラヴィーア第１巻 第１番 ハ長調 BWV846 リヒテル 1970 年　）この曲は、大学の厳しい体育会の合宿所でもよく聴いていた曲です。当時まだ教会とは縁がありませんでしたが、リヒテルの演奏が私を励ましたり、慰めてくれました。刺激的なところがないですが、心に響きます。どこまでも優しく、思いやりに溢れた演奏です。最近、何度も繰り返して聴いていますが、神様はどんな方なのか想像させてくれます。私を導いてくださった神様がこれからも私たちを導いてくださるように感じます。

反対に心乱される悪天使はメディアからの情報です。２つのことを感じています。2011 年の東日本大震災・原発事故の後、東北以外の地域の人はあまり学ばなかった、あの時より脆弱になったということです。長く丁寧な取材で大切なことだけ伝える、というよりも短い時間でインパクトのある記事を探し回って焦って流してる。その風潮が今の報道と政治にもあるように感じます。

もう１つは自分も感じていた違和感です。自然災害のボランティアに行った際に、後ろめたさも感じながら印象的な現場を探して写真を撮っていました。報告するときのためです。写真そのもの

は本物ですが、見て来た一部に過ぎません。今のメディアは、番組作りのために印象的なところだけ紹介している。その印象的な内容だけ見たり、聞かされていたら、全体の姿からだいぶズレてしまうのではないか？　と感じています。私が、地方にいることも影響しているのでしょう。緊迫感や不安で自分をいっぱいにするよりも静かにしていることが大事だと思っています。

幼稚園の休園が 5 月 24 日まで延長されたので、「ヨブ記の黙想　試練と恵み」を振り返っています。これまでの自分の信仰の歩みとこれからの歩みを見つめる時間にします。合わせて英語に力を入れています。人と会う時間が取れない中で、日頃できなかったことをして心身を整えていきます。リヒテルの演奏は、いつくしみに溢れた神様を私に感じさせてくれます。このようは善天使の声に私たちが導かれるように願いましょう。